

第 3 章

大阪狭山市の歴史文化の変遷

第 1 節 歴史の変遷を辿る	33-55
第 2 節 日々の暮らしの変遷	56-63

第3章 大阪狭山市の歴史文化の変遷

第1節 歴史の変遷を辿る

1 先史

①旧石器、縄文・弥生時代の狭山

■旧石器時代

大阪狭山市付近では、旧石器時代の末ごろから人々の生活が営まれていた。市内で最初に確認された石器は、東野で出土したサヌカイト製のナイフ型石器である。同種の石器は、ひつ池と池之原からも発見されている。また副池からは、近畿地方では珍しい黒曜石の石核も見つかっている。黒曜石は近畿地方では産出しないため、交易によって運ばれてきたと考えられる。

本市では、旧石器時代の大きな集落跡は見つかっていないが、隣接する寺ヶ池では大阪府全域で発見されている有舌尖頭器も採集されている。この石器は約1万年前（旧石器時代）に盛んに用いられた。長い槍先状の形をしており、下部に柄を取り付けるための舌と呼ばれる突起がある。柄をつけることで、遠くにいる動物も正確に仕留められるように工夫したと考えられている。

■縄文・弥生時代

市内で見つかった縄文・弥生時代の石器には、石鏃、スクレイパー、石匙などがあり、いずれも大阪府と奈良県の境にある二上山産出のサヌカイトでつくられている。サヌカイトは、打撃を与えると薄くはがれる性質をもつ岩石で、人々はサヌカイトを生活に必要な道具に加工したのである。また、弥生時代の銅鐸は堺市や南河内では何点か出土しているが、本市では出土していない。

②古墳時代の狭山

日本列島で須恵器の生産が始まった時期は、今からおよそ1600年前の古墳時代中期である。その一大生産地となったのが、現在の堺市・和泉市・岸和田市から本市にまたがる泉北丘陵とその周辺地域であった。『日本書紀』崇神天皇7年8月の条に、須恵器をつくった場所を「茅渟県陶邑」と記していることから、この生産地は陶邑と呼ばれている。この一帯は、須恵器を焼くための窯をつくるのに適した地形であり、須恵器づくりに必要な土や水、燃料となる薪が手に入りやすいという条件をそなえていた。また、製品を搬出するのにも便利な場所であった。



図3-1 市内出土の石器



図3-2 市内出土の須恵器

この時期、大王たちは河内を中心に勢力を築き、一帯に多くの古墳を築造した。本市の東北には古市古墳群^{ふるいちこふんぐん}、西北には百舌鳥古墳群^{もずこふんぐん}があり、権力を誇示するような大古墳も築造された。残念ながら本市域には明確な墳丘をもつ古墳は確認されていない。ただ、昭和40年（1965）に宅地開発工事中に1基の古墳が市域の西北部にあたる現在の山本東で発見された。すでに工事が進んでいたため、わずかに墳丘の一部と石室の一部が確認されただけである。これは6世紀後半の古墳と推定され、「狐塚古墳^{きつねづかこふん}」と命名された。



図 3-3 須恵器窯発掘の様子

須恵器は、これらの古墳の副葬品などに使われたと考えられる。6世紀に入ると、古墳に葬られる人々の階層が広がり、古墳の数も増加したため、須恵器の需要も大幅に増加するようになった。

本市では現在、100基近くの窯跡が確認されている。それらの調査の結果、本市域で須恵器の生産が始まった時期は、5世紀末ごろで、窯跡の多くは6世紀から7世紀までのものであった。これは、須恵器の需要が大幅に増加した時期にあたる。

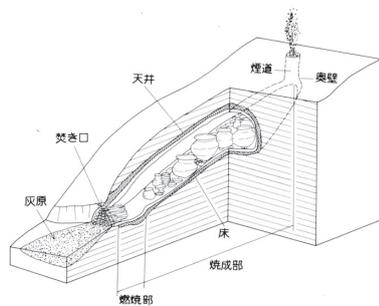


図 3-4 須恵器窯模式図
(『狭山の歴史と文化』所収の図を転載)

中には、100年近くの長期間にわたり使われていた窯もあった。例えば、池尻中3号窯は5世紀後半から6世紀、陶器山309号窯は6世紀中ごろから7世紀前半にかけて使用されていたと考えられる。さらに、狭山池5号窯のように、7世紀前半に窯をつくり替えて生産を続けたとみられる窯もあった。このころは、狭山池が築造された時期と重なる。

盛んであった泉北丘陵一帯での須恵器生産も、奈良時代になると、燃料となる薪の不足などから衰退し、主流は東海地方や備前地方に移っていくことになる。



図 3-5 市内窯跡出土の須恵器

2 古代

①飛鳥時代と狭山池の誕生

■飛鳥時代

本市のほぼ中央に位置する狭山池は、日本最古のダム式の溜め池で、『日本書紀』の崇神天皇 62 年 7 月の条には、河内の狭山で用水が不足し、民が困っているのが、多くの池溝を掘って農業を振興せよとの詔が出たと記されている。また『古事記』には、次代の垂仁天皇すいにんてんのうの時に狭山池を築いたとある。

『日本書紀』には、推古天皇の時代に多くの地溝を開発したことや、官道を整備したことなども書かれていて、推古天皇のころに畿内で大規模な土木工事が行われていたことがわかる。本市の狭山池の築造も、その一環であったと考えられる。

このことは、狭山池の「平成の改修」に伴う埋蔵文化財の発掘調査で確認されることとなった。狭山池の最下層に対応する木製の樋管ひかんが北堤の東端近くで見つかり、使用されたコウヤマキの木材が、年輪年代測定法によって 616 年（推古天皇 24 年）に伐採されたものであることがわかった。この発見により、狭山池は 7 世紀前半、616 年ごろに誕生したことがほぼ確定した。

また、堤の盛土のすべりと崩れを防ぐため、葉のついた枝を土の間に敷きこむ敷葉工法しきはこうぼう しきそだこうぼう（敷粗朶工法）がとられていたこともわかった。この土木技術は、古代中国や朝鮮半島から伝わった当時の最新技術で、韓国最古の溜め池といわれている碧骨堤（ピョッコルチュ）もこの工法で造られ、狭山池の誕生は東アジアの盛んな交流を物語っている。



図 3-6 狭山池の東樋

②奈良時代の行基の活動と平安時代の狭山

■奈良時代

奈良時代に活躍した僧行基ぎょうきは、天平 3 年（731）、狭山池院さやまいけいんと尼院にいんをつくった。院とは民衆への布教のための道場のような施設であり、行基が造営した橋や池などに付属して建てられた。

『行基年譜』ぎょうきねんぷに引用され、信憑性が高いとされる「天平十三年記」には、行基が築造に関わったと考えられる 15 カ所の池の一つとして、狭山池が記されている。また『続日本紀』しよくにほんぎには、天平 4 年（732）12 月に河内国丹比郡かわちのくにたじひぐんに狭山下池さやましもいけが築かれたと記されている。狭山下池は、狭山池の約 1 キロメートル北に在る現在の太満池たいまにあたる可能性が高い。

行基とその集団は、狭山池の近くに狭山池院・尼院をつくり、



図 3-7 行基菩薩像（唐招提寺蔵）

狭山池の改修や国が主導した狭山下池の築造に関わったと思われる。その後、天平宝字6年（762）に狭山池の改修工事が行われ、延べ8万3千人が動員され、狭山池の堤がかさ上げされ、貯水量も2倍になった。

奈良時代の注目される人物に、中臣村山連首麻呂なかとみのむらやまのむらじおびと まろがいる。首麻呂は、史料から名前がわかる最初の狭山出身者で、狭山郷の有力者層と考えられる村山連浜足の戸むらやまのむらじはまたり こに属し、天平18年（746）から約10年間、都の写経所に勤務した。彼は、写経に誤りがないかチェックする校生として主に活動し、写経自体にも関わったようである。

首麻呂は、天平20年（748）に出家を希望している。彼は朝廷の祭祀を司る役職であった中臣系氏族の一員であり、狭山神社や狭山堤神社を祀る人々と関係が深かったはずである。ところが、仏教に接し、出家を希望するまでになったのである。行基が狭山池を改修したり、狭山池院や尼院をつくった天平3年（731）、彼は8歳の少年にすぎなかったが、狭山池院などで行われたであろう行基たちの法会や説法が、少年首麻呂の心に強く響いた可能性は否定できない。

■平安時代

奈良時代に行基たちの活動の拠点であった狭山池院・尼院や、そこを中心とした狭山地域における仏教的活動は、その後どのように展開したのであろうか。ほとんど史料がないので確かなことは言えないが、最澄さいしやうの『顕戒論』けんかいろんに引用された文書が手がかりを与えてくれる。弘仁10年（819）の文書しょうそうずに少僧都2名が署名するところ、その一人である勤操ごんぞうが「在狭山池所」とあって署名していない。つまり、この時に勤操は「狭山池所」にいたことになる。

この「狭山池所」と行基の造った狭山池院・尼院との関係は不明であるが、僧の勤操が滞在していることから見て、「狭山池所」は仏教的施設であった可能性があり、ひいては行基たちの狭山池院・尼院の系譜を引いている可能性がある。9世紀の初頭ごろにあつては、行基の活動が維持されていたことになる。

また、東樋の取水部から、年輪年代測定法によって弘仁8年（817）の部材が見つかっている。このことから、弘仁年間に狭山池の改修工事が行われていたことになる。

平安時代初期の貞観元年（859）に「陶山の薪争い」すえやまが起こっている。これは陶邑での須恵器生産の衰退を示すもので、須恵器を焼くための薪を採る陶山が、河内国に属するのか和泉国に属するのかをめぐって両国が対立したものである。最終的には、和泉国の地とする裁定が示されている。この事件の経緯から、当時の



図 3-8 絵図に見る太満池

(丹北・丹南・志紀・

八上四郡村絵図 部分

田中俊夫氏蔵)



図 3-9

東樋の延長部分

コラム 行基焼と呼ばれた須恵器

須恵器は、地方によっては「行基焼」と呼ばれている。行基が活躍した奈良時代は、地方でも須恵器生産が盛んに行われるようになり、陶邑においては須恵器生産が最盛期を過ぎ、次第にその生産が斜陽化していった。須恵器が、いつごろから「行基焼」と呼ばれたかは定かではないが、大修恵院（現 高倉寺宝積院）の建立をはじめとした行基の社会活動が、須恵器を焼く工人たちの支持と信仰を集め、いつしか「行基焼」と呼ばれるようになったのではなかろうか。



図 3-10 狭山池 5 号窯出土須恵器



図 3-11 高倉寺宝積院（堺市）

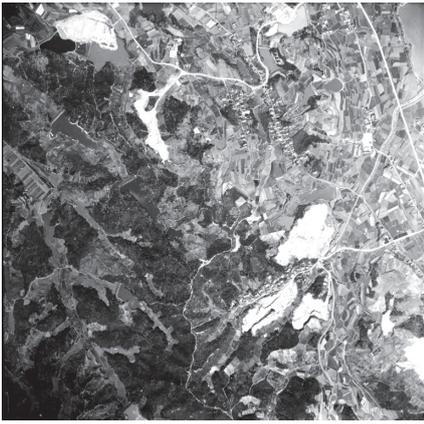


図 3-12 河内・和泉国境付近

陶器では、須恵器生産に必要な薪が大幅に不足していたことがわかる。燃料用の薪が不足したため、薪を求めて丘陵の奥へ奥へと移動していき、ついには争いの原因となった。

平安時代も後期に入ると、全国の土地は、京都・奈良の権門（貴族・寺社）などが所有する荘園に分割された。丹南郡狭山郷では、仁安2年（1167）までに興福寺の荘園日置荘が成立していた。古代以来の狭山郷は、荘園や国衙領の形成によって分割され消滅した。

この時期、大中臣姓の左山大中大夫助平が、狭山郷内に私領を形成した。大阪狭山市東野西に、小字名「助平田」がある。これは、左山助平の開墾地と考えられる。左山助平の私領を組み込んで、鎌倉時代初期の建久2年（1191）までに興福寺領狭山荘が、建永元年（1206）までに王家（天皇家）領野田荘が成立していた。

左山助平は、興福寺・春日社と結びついて狭山郷を開墾した在地領主であろう。建久2年（1191）、狭山荘をめぐって河内国司と興福寺が争い、建永元年（1206）、河内国司が狭山荘とその北の野田荘に国の新牧を設定し、稲作を妨害した。しかし、朝廷や幕府に強訴を行う興福寺の実力を背景に、狭山荘は国司や国衙が介入できない荘園として確立していったと考えられる。

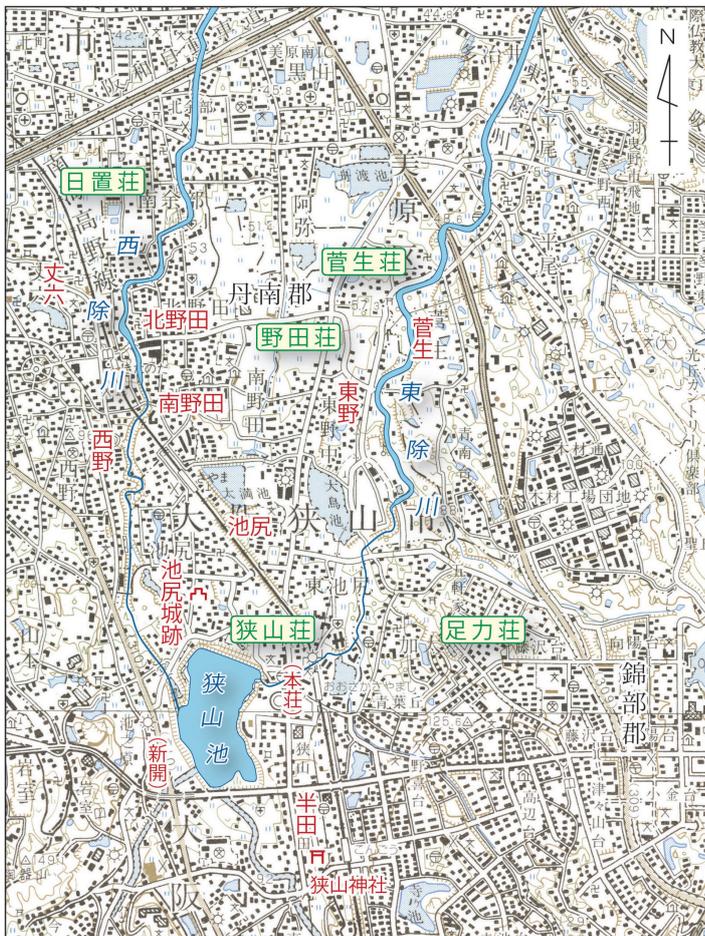


図 3-13 市域付近の荘園分布
 (『大阪狭山市の歴史』所収の図を転載)

3 中世

①重源による狭山池の改修と鎌倉時代の狭山

中世の狭山を考えるうえで、最も重要な人物が俊乗房重源^{しゆんじやうぼうちやうげん}である。重源は東大寺の再興に尽力した勸進聖^{かんじんひじり}である。治承4年(1180)、平氏の南都焼き討ちにより、東大寺・興福寺が炎上した。翌年、61歳の重源は朝廷より東大寺復興の勸進^{じしやう}を命じられ、源頼朝の積極的な支援も得て、文治元年(1185)8月、大仏開眼供養の日を迎えた。

重源は、建永元年(1206)、86歳でその生涯を閉じるが、その目覚ましい活動は晩年にまとめられた『南無阿弥陀仏作善集』^{なむあみだぶつさぜんしゆう}に記されている。建仁2年(1202)には、狭山池を改修したことが記されている。この記述を裏付ける資料が平成5年(1993)に見つかった。これは狭山池の平成の改修にともなう発掘調査で見つかったもので、重源の狭山池改修の内容を刻んだ碑が池底に眠っていた。刻文には、「狭山池の水を引く摂津・河内・和泉3カ国50余郷の民衆の依頼により工事をを行った」ことが記されていた。

丹南郡日置荘には、鍋・釜や寺院の梵鐘・灯炉^{ぼんしやう とうろ}を鑄造する鑄物師^{いも}が集住した。河内鑄物師は朝廷に奉仕する供御人^{くごにん}や奈良東大寺の鑄物師の身分を有し、神人と同様の特権をもった。狭山荘でも承久3年(1221)に「勝□寺」^(判読不明)の鐘が鑄造され、寛元5年(1247)には佐山太郎が薩摩国河辺郡鎮守飯倉新宮の鐘を鑄造している。遠く薩摩の鐘を鑄造した佐山太郎は狭山荘の鑄物師で、日置荘の鑄物師と同様、鑄物の諸国販売の特権を有したであろう。狭山荘にも鑄物師の工房があったと考えられる。

興福寺は、鎌倉時代中期の弘長3年(1263)以前、堤防と地溝を築いて狭山本荘の新地を開発していた。続いて同年、本荘以外の田畠の開発を計画し、新開を興福寺の一円領とするよう朝廷に申請して許可を得た。この新開の四至は、東が「狭山河」、南が「久佐佐峰道」^{くささみねみち}から「大鳥郡境道」^{おとりぐん}、西が「和泉国大鳥郡・河内国丹比郡の境道」^{わいせいこくおとりぐん}から「佐志久美岡」^{さしくみのおか}、北は「丈六池」^{じやうろくいけ}「竜園寺南」となっている。

狭山荘の新開は、狭山池をはさんで狭山本荘の西から南に位置する。狭山荘の新開の地域は、ほぼ現在の市域西部に収まり、市域東部の本荘と併せて、現在の全市域とほぼ同じ範囲にあたる。なお、新開でも神社が勧請され、集落の形成が進んだ。



図 3-14 重源上人坐像

(東大寺蔵)

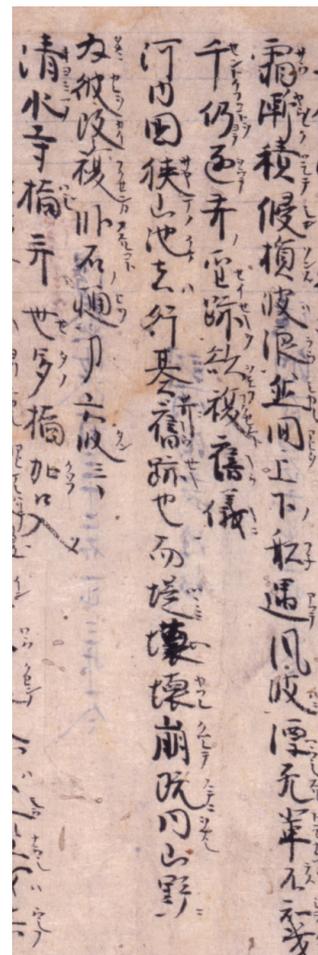


図 3-15 南無阿弥陀仏作善集

(東京大学史料編纂所蔵)

コラム 狭山池から見つかった石樋に転用された刳抜式家型石棺

重源の狭山池改修には、古墳時代の刳抜式家型石棺くりぬきしきいえがたせつかん ひかんが樋管として転用されていた。重源が一生の作善さぜんを記した『南無阿弥陀仏作善集』には、狭山池の改修いしひに石樋を伏せたことが書かれていた。平成5年（1993）の発掘調査によって、石樋とは古墳の中の刳抜式家型石棺を集めたもので、小口こぐちを刳り抜いた石棺を並べ、樋管として使っていたことが確認された。大正～昭和の改修工事と平成の改修工事によって、それぞれ7個と9個の石棺が掘り出されている。これらの石棺こそが、重源が石樋とした石棺である。数多くの石棺が、いったいどの古墳から運ばれてきたものであるか、明らかにすることは難しいが、南河内地域の古墳から狭山池へ持ち込まれたと推定されている。



図 3-16 狭山池博物館の石樋の再現展示



図 3-17 狭山池北堤に保存されていた石棺



図 3-18 大正の改修時の発掘の様子

②建武の新政～室町時代の狭山

延元^{えんげん}3年・暦応元年^{りやくおう}（南朝・北朝 1338）に足利尊氏^{あしかがたかうじ}が室町幕府を打ち立てたのち、吉野に逃れた後醍醐天皇は南朝を立てた。南朝方の楠木軍は、幕府方の野田荘の城郭を攻略し、狭山荘の池尻・半田で幕府軍と交戦した。池尻付近は、河内における戦いの最前線だったのである。

興国^{こうこく}3年・康永元年^{こうえい}（1342）、楠木正成の子息正行^{くすの き まさしげ}は、野田荘^{の だのしょう}内の岩瀬田を河内国^{かんしんじ}観心寺^{しやうへい}の得分^{じやうわ}とし、正平2年・貞和3年（1347）楠木正行軍は狭山荘の池尻で幕府軍と交戦した。正行と弟正儀の時期には、狭山荘周辺は南朝の勢力が及んだと考えられる。

その後、南朝側はしだいに劣勢となり、明德^{めいとく}3年（1392）に北朝と南朝は合体した。南河内も、新たな室町幕府体制に組み込まれていくのである。

室町期、明德3年（1392）の狭山荘では、年貢が十七貫五百文であった。しかし、室町時代は、室町幕府（将軍）が支配する荘園が増加した時代である。狭山荘でも、応永29年（1422）、幕府政所執事^{まんどころしつじ}の伊勢氏が興福寺に年貢を請け負う代官となり、以降、興福寺の支配は弱体化していった。そして、戦国前期、狭山荘は幕府御料所^{みなごりょうじよ}となり、伊勢氏及び政所代の蜷川^{にながわ}氏が管理した。

戦国期の本市での出来事に安見美作守宗房^{やすみ みまさののかみむねふさ}の狭山池改修がある。安見宗房は、河内の戦国時代の下剋上を代表する武将で、河内守護代^{ゆざながのり}の遊佐長教^{えいろく}に仕えた。そして、永禄2年（1559）ごろに狭山池を改修したようであるが、改修工事は成功しなかったという伝承が残されている。安見は永禄2年（1559）に、河内に侵攻した三好長慶^{みよしながよし}と戦っており、それ以降は工事ができる状態ではなくなったため、未完に終わったのであろう。



図 3-19 蜷川貞周書状（個人蔵）



図 3-20 河内国国人安見氏伝古幹録
（八尾市立歴史民俗資料館蔵）

4 近世

①安土桃山時代と北条氏規

戦国時代に本市の半田村の一部を所領とした羽柴秀吉近臣の伊東祐兵は、代々日向国の領主をつとめ、同国那賀郡飢肥城の城主であった伊東氏の出身である。島津氏の圧迫を受け、日向を逃れて、その後秀吉に仕えた。天正10年(1582)の山崎の合戦で戦功をたて、天正11年(1583)に現本市域の河内国丹南郡半田のうち500石が与えられた。しかし半田村が伊東祐兵の所領であったのは、わずか4年間であった。

伊勢宗瑞(北条早雲)に始まる戦国大名北条氏は、小田原城を拠点に関東地方に一大勢力を誇ったが、天下統一をめざす豊臣秀吉の小田原攻めにあい、降伏した。当主氏直は、徳川家康の娘婿であったことから自害をまぬがれ、叔父の氏規とともに高野山に入った。この氏規が、狭山と初めてかかわった北条氏である(45ページ図3-27参照)。

三崎城主・館林城代の氏規は葦山城将として秀吉の軍勢にも耐え、武勇をとどろかせた人物で、北条氏内にあつては秀吉や家康との外交交渉を担った。氏規は高野山に入ったのち、秀吉に仕え、天正19年(1591)に河内国丹南郡に2千石の所領を与えられた。この所領には、本市内の今熊村と岩室村が含まれていたと考えられている。これが、北条氏と狭山との最初の結びつきとなる。

文禄3年(1594)には、河内国丹南郡・錦部郡・河内郡で約7千石の所領を与えられ、市域の池尻・岩室・今熊の3カ村が含まれた。氏規は、秀吉の朝鮮出兵の時には、子息で氏直の養子となっていた氏盛とともに肥前名護屋に出陣している。氏規は慶長5年(1600)に死去し、その遺領は長男氏盛が受け継いだ。氏盛は、徳川家康に仕えた後、天正19年(1591)に秀吉から下野国梁田郡で4千石を与えられ、秀吉の家臣となっていた。その所領は、父氏規の遺領約7千石と合わせて約1万1千石となり、大名格に復した。氏盛は、狭山藩北条氏の初代藩主とされている。

②江戸時代の狭山藩の動向

北条氏盛は、再び徳川家康に仕えるようになり、関ヶ原の合戦にも加わった。しかし、慶長13年(1608)32歳の若さで死去し、その遺領は嫡子氏信が受け継いだ。氏信(2代藩主)は、将軍徳川秀忠に仕え、慶長17年(1612)、江戸愛宕下に屋敷を拝領する。大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡したのち、氏信は初めて狭山の地を訪



図3-21 北条氏直画像
(早雲寺蔵)

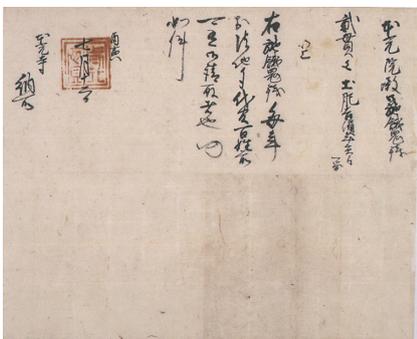


図3-22 北条氏規印判状
(神奈川県立歴史博物館蔵)

コラム 狭山藩歴代外藩祖 北条氏規

初代狭山藩主である北条氏盛の父である氏規は、狭山藩では歴代外藩祖としてあがめられている。小田原城開城にあたり、氏政・氏照が切腹した際、介錯を務めたのが弟の氏規である。氏規は2人の兄を介錯した後、その刀で自害しようとしたが、検視の者に止められたという。氏規は、家康が駿河の今川義元の人質であったころ、やはり人質として駿河にいて家康とは懇意であった。また、秀吉も氏規の武勇と人物を見込んでいたようで、後に京都に呼ばれ、秀吉に仕えるようになる。この氏規の存在が、後の狭山藩へとつながっていくのである。



図 3-23 徳川家康起請文（神奈川県立歴史博物館蔵）

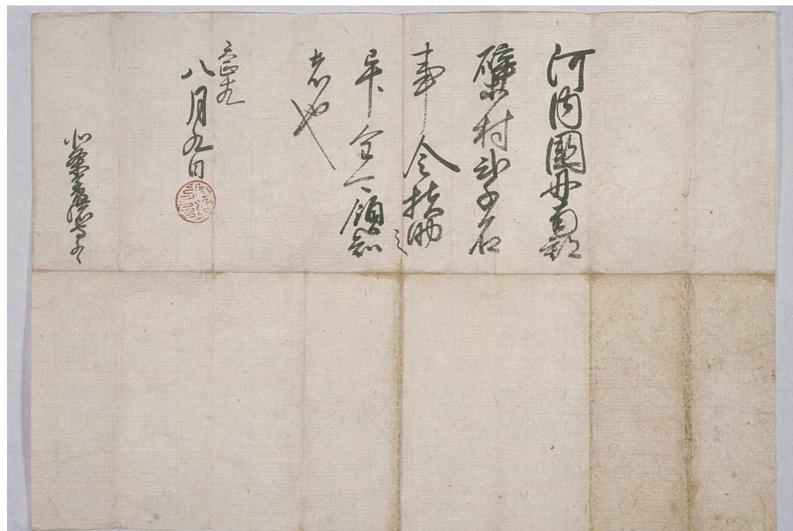


図 3-24 豊臣秀吉朱印状（神奈川県立歴史博物館蔵）

れた。氏信は、池尻村に陣屋を築き、狭山藩が実質的に始まった。

その後、狭山藩領は、何度も変わっている。寛文元年（1661）、下野国梁田郡の所領が常陸国筑波郡に移され、元禄4年（1691）には下野国都賀郡に移された。さらに元禄11年（1698）の5代藩主氏朝のときに、下野国の所領が近江国滋賀郡などに移され、元禄12年（1699）には河内国丹南郡の所領の一部が古市郡に移された。このとき、狭山藩領であった岩室・今熊両村は幕領となり、市域の狭山藩領は池尻村のみとなった。以上のような変遷をたどりつつも、池尻村に陣屋上屋敷を置いた狭山藩は、明治2年（1869）の廃藩まで、12代にわたり続いた。

その中で、狭山藩の歴史に大きな足跡を残し、「中興の祖」といわれたのが5代藩主氏朝である。氏朝は享保5年（1720）に伏見奉行、享保19年（1734）には寺社奉行兼奏者番に任命された。いずれも幕府の要職で、歴代狭山藩主の中でも最も重職についている。また氏朝は、和歌と歌学にも造詣が深く、上方で古今伝授を代表する歌学者の平間長雅に師事し、文人としてもその才能を発揮した。

長雅の永年にわたる氏朝への伝授書群と氏朝自身による多数の筆写本は、現在、宮内庁書陵部に所蔵されている。さらに氏朝は、北条家歴代の系譜や記録の整備にも熱心で、『家譜自撰之氏朝筆』（氏朝自撰家譜）や『氏朝譜』（氏朝公日記）を著している。

幕末の狭山の特記すべき事項の一つは、教育熱の高まりである。狭山藩陣屋の上屋敷内に藩校簡修館、村々に寺子屋がつけられた。藩校簡修館は、11代藩主北条氏燕がその設置を推し進めたもので、狭山藩の評定所を、平日は「学問所」として使用することになった。幕末の藩政改革や対外的危機感の高まりなどを背景に、優れた人材の育成が急務と考えたのであろう。

もう一つの特徴は、狭山藩の軍制改革である。文化8年（1811）、狭山藩は幕府から和泉国の海岸部の警衛を命じられ、嘉永6年（1853）には堺の海岸警衛と駿府加番を命じられた。文久3年（1863）からは和泉国大鳥郡の高石海岸に砲台を築き、警衛にあたっている。

小藩ながら狭山藩が幕府から警衛の役割を期待されたのは、軍制改革に着手していたからで、兵力を強化するために、身分を超えて農民を戦闘員として取り立て、農兵隊を組織していたからである。農兵たちは、鉄砲組や大砲組などに組織され、警衛に従事した。しかし、軍備の充実は軍事費の増加を招き、狭山藩の財政を直撃し、財政難に陥っていった。



図 3-25 狭山藩幕末期警衛行列図
(部分 個人蔵)



図 3-26 陣屋上屋敷にあった藩校簡修館
(「狭山藩陣屋上屋敷図」部分 個人蔵)

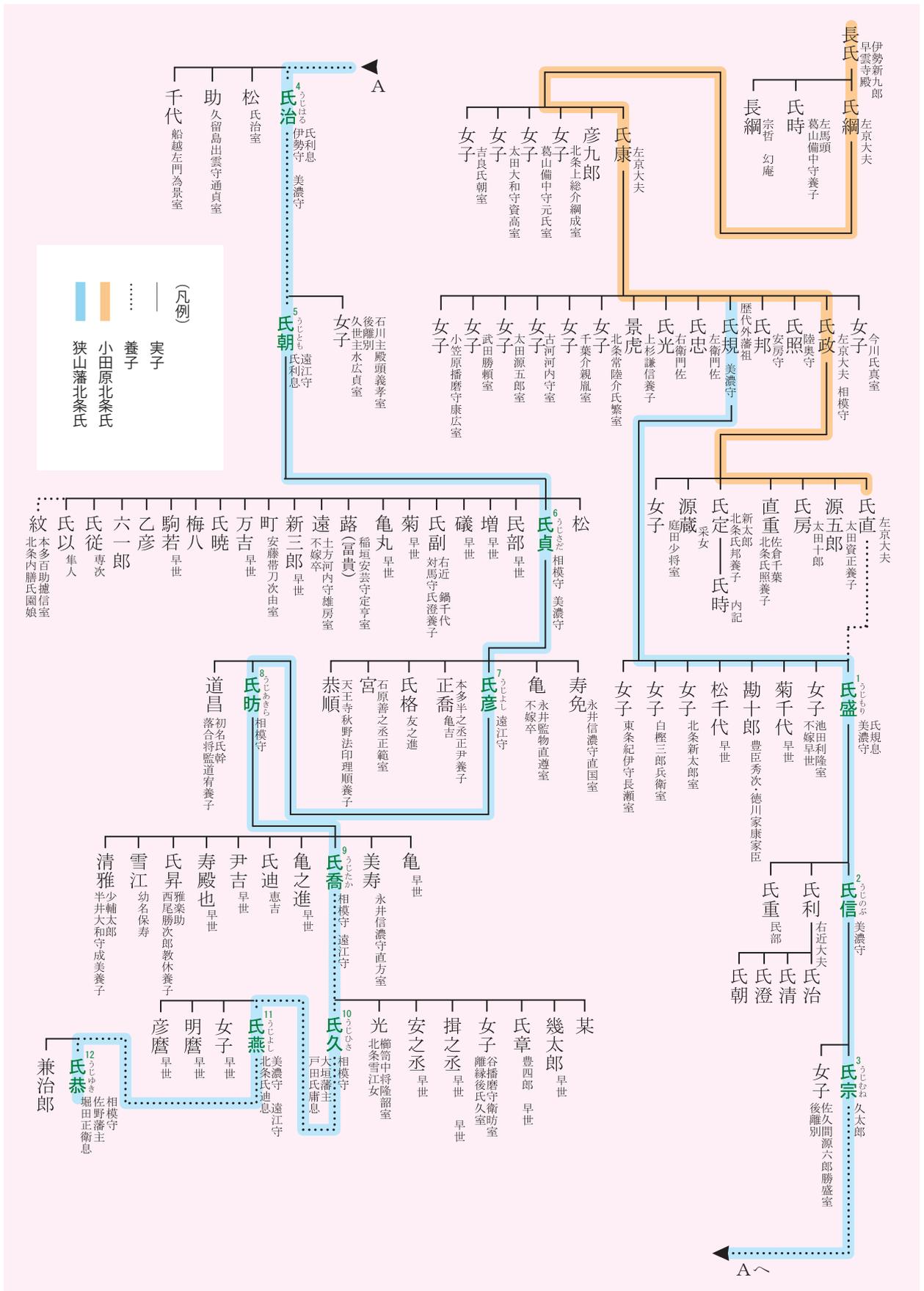


図 3-27 北条氏系図

(『狭山池築造一四〇〇年・狭山藩誕生四〇〇年記念特別展 狭山藩北条氏一 戦国大名 小田原北条五代の末裔一』展示図録所収の図に加筆・修正)

コラム 家譜と日記を遺した北条氏朝

5代藩主^{うじとも}氏朝は、北条家歴代の系譜編さんに情熱をかけた藩主であった。宝永4年(1707)に『家譜略書』^{かふりくしょ}を編さんし、その後も『家譜自撰之氏朝筆』(氏朝自撰家譜)を享保17年(1732)に編さんしている。後者は、記述が充実していて、史実の詳細さにおいて、この家譜の右に出るものは無い。また、『家譜自撰之氏朝筆』とは別に、氏朝自身の系譜が『氏朝公日記』として編まれ、この二つは同じ年記を記していて、一对の作品として考えられている。養子として家督を継いだ者として、北条家の歴史と精神的伝統を、自身の位置付けとともに強く意識していたからであろう。

廿日奉書東 廿一日於御座間以御懇
上意伏見奉行袖 仰付 廿日朝勤
御用奉 往 廿三日登 殿 奉 差 答 間 也
御留守 衆 之 上 也 左 幸 席 政 菊 之 間
御恩 願 也 七月 二日 於 評 定 所 誓 言 詞
八月 無 別 各 九月 十日 御 暇 向 之
拜 領 物 外 昔 金 五 枚 祿 下 御 役 之 宣 也
廿三日 新 三 郎 誕生 廿七日 啓 是 今 月
右 近 方 家 中 仕 置 政 申 渡 十月 十日
伏 見 著 上 月 之 配 所 巡 見 註 御
役 屋 布 修 理 申 付 十二月 奥 向 建 之
家 中 者 引 移 申 付
同 六 年 辛 丑 正 月 八 日 裡 從 佐 出 越
今 年 家 中 借 米 返 之 二 月 普 請
出 末 法 雲 寺 獨 園 入 院 開 堂 請 主
此 僧 已 後 代 如 斯 且 此 僧 就 會 寺 之
湖 山 ト 二 三 月 十 五 日 從 以 戶 奥 方 引
越 也 四 月 出 月 廿 八 日 奉 書 京 都 之
宿 治 相 達 從 回 奉 行 中 三 日 宿 諸 司
代 參 府 也 法 山 新 町 半 分 交 配 願 之
通 誌 仰 付 且 亦 佐 出 池 之 第 七 日 卯
廿 日 右 近 迫 病 危 瘡 毒 十 二 歲 也 信 之
兩 知 行 下 野 五 百 石 御 藏 米 五 百 石 上 下
屋 布 上 歸 武 新 傳 御 暇 娘 廿 日 奉 書
長 尾 母 者 足 石 川 兵 衛 引 取 五 月 廿 日
吉 師 東 西 北 遠 回 之 六 月 廿 九 日 裡 之
著 帶 七 月 八 日 新 三 郎 卒 於 佐 官 寺
葬 之 同 月 無 別 八 月 廿 日 開 山

図 3-28 氏朝公日記 (部分) (北条尚氏蔵)

依 祓 宛 行 旨 也 者 賴 時 代 御 座 間 以 御 懇
同 六 年 辛 丑 五 月 十 日 叙 齊 任 官
同 十 三 年 戊 申 五 月 十 八 日 卒 三 十 二 歲
法 名 淨 誓 心 徹 大 居士 號 松 林 院
稱 別 大 坂 專 念 寺 氏 規 有 古 碑 朽
碎 氏 朝 元 禄 十 一 年 戊 寅 二 月 八 日 氏 規
別 年 也 仍 思 早 雲 寺 氏 治 先 事 同 彫 造
石 碑 成 法 事 此 年 在 佐 山 名 代 朝
比 奈 賴 母 詣 三 月 春 江 府 之 節 有 故
路 程 遠 仍 不 拜 翌 年 佐 山 上 之 節
詣 專 念 寺 禮 之
豐 冠 氏 以 緣 疎 娶 彼 近 臣 娘
長 男
氏 信 伯 氏 勝 童 名 太 部 初
從 五 位 下 兼 濃 守
母 舟 越 伊 豫 守 永 景 姉
室 佐 久 間 備 前 守 安 政 女 甄 瑞 光 院
慶 長 十 四 年 己 酉 河 内 國 丹 南 郡 岩 室 村
之 地 為 板 山 池 底 仍 代 地 錦 部 郡 彼
方 村 落 陸 共 六 四 十 八 石 同 十 月 廿 八 日 敕
宛 行 旨 桐 東 市 正 有 書 大 岡 朱 印 之
事 本 多 佐 渡 守 同 上 野 外 有 際
同 十 七 年 壬 子 十 二 歲 於 駿 府 奉 謁
大 權 現 其 後 奉 任 秀 忠 公 氏 變 光 下 屋 布
元 和 元 年 己 卯 江 府 一 谷 御 門 番 大 坂
御 陣 後 佐 山 御 暇 屋 布 未 取 立 故
池 尻 村 西 端 壯 屋 田 中 孫 左 衛 門 宅
當 今 住 之 侍 共 足 輕 人 是 者 百 姓 家
寫 此 係 在 衛 門 大 坂 龍 之 時 母 法 光 院

図 3-29 氏朝自撰家譜 (部分) (北条尚氏蔵)

③狭山池の改修

近世においても狭山池は、多数の村々に水を供給する重要な溜め池であり、しばしば改修が行われた。慶長13年(1608)、大坂城の豊臣秀頼は、干害に困っていた百姓の訴えを受け、豊臣家老でありながら摂津・河内・和泉の3カ国の徳川幕府方の国奉行を兼ねる片桐且元に、狭山池の改修を命じた。

この慶長の改修では、新たに東樋・中樋・西樋が整備され、中樋と西樋には水面の高さに合わせて取水できる「尺八樋」が設けられた。また、狭山池から余剰の水を出す東除が新設され、西除や堤も拡張して池の面積は拡大した。

「慶長の改修」の後、池の維持管理のため、水下惣代・池守・樋役人が置かれた。水下惣代は、池の水を使用する下流の村々の代表で、番水や池の修理費用分担などを担った。池守は、池の維持管理や番水の責任者で、樋役人は、樋の開け閉めや池の管理にあたり、東新宿に30軒、西新宿に7軒が住んだ。

慶長20年(1616)、大坂夏の陣で豊臣家が滅亡すると、狭山池の支配は江戸幕府に移った。改修が必要となると、幕府代官や堤奉行の監督下で工事が行われた。その費用は、幕府と藩領主、水下村が分担した。享保6年(1721)に幕府は、狭山池を幕領のまま、その支配権を狭山藩にまかせることとした。しかし、延享5年(1748)、再び幕府の支配へと戻した。以降、幕府による支配が幕末まで続いた。

狭山池の灌漑範囲は、17世紀初頭は80カ村に及び、現在の大阪市平野区や八尾市にまで広がっていた。しかし長距離の番水は、水番などの負担が多く、効率も悪いため、17世紀中ごろには53カ村に減少した。さらに、大和川の付け替えにより、新大和川以北の村々への給水が不可能となったことから、19世紀には38カ村にまで減少することとなった。

④村の成り立ちと領主

近世において、市域には9カ村があった。これらの村は、その成り立ちから大きく二つに分けられる。一つ目は、中世から狭山荘・野田荘・日置荘に存在していた村で、東野・池尻・半田・岩室・今熊の5カ村である。この5カ村は、豊臣秀吉の命で実施された太閤検地により村単位に再編成された。

二つ目は、近世になって新しく開発された村(新田村)で、山本新田・茱萸木新田・西山新田・大野新田の4カ村である。戦乱が終わり、社会が安定に向かった17世紀前半は、全国的に開発



17世紀の灌漑範囲



19世紀の灌漑範囲

図 3-30 狭山池灌漑範囲の変遷

(『大阪狭山市の歴史』所収の図を転載)

コラム 狭山池の池守田中家

池守は、池の維持管理や番水の責任者で、片桐且元^{かたぎりかつもと}の慶長の改修を担当した下奉行の一人であった池尻孫左衛門^{まござえもん}の子孫である田中家が代々務めた。池守は、特定の大名の家臣ではなく、狭山池の実質的な管理や複数領主の支配を受ける水下の村々への池水の配分に携わる独立的な存在であり、給米は水下の村々が水高に応じて負担していた。池守田中家には、およそ1万3千点の文書群が今に伝えられている。これらの文書の中には、池守としての文書以外に、狭山藩北条氏の代官、狭山藩領池尻村の庄屋、さらには明治以降の狭山村村会議員や狭山村村長などの様々な関連文書も含まれている。



図 3-31 田中家文書黒箱 (田中俊夫氏蔵)



図 3-32 田中家文書の一部
(田中俊夫氏蔵)

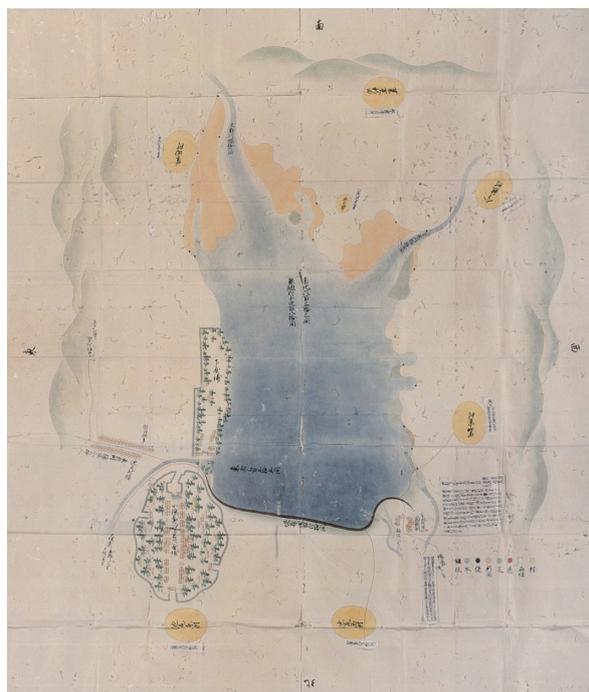


図 3-33 狭山池惣絵図 (田中俊夫氏蔵)

ブームの時代であり、近畿でも新田開発が急激に進行した。寛永18年（1641）に開発が始まった茱萸木新田もその一つである。

また、河内・和泉の国境の位置する市域の西部には、近隣の日置荘7カ村の入会（共同利用）地であった「大野芝」と呼ばれる原野が広がっていた。この地を元禄8年（1695）ごろに江戸の町人である太田新造と浅田喜兵衛が開発した。そして、買主によって山本新田・西山新田・大野新田となったのである。

これらの市域の9カ村の支配領主は、村ごとに入り組んでおり、交代も頻繁であった。なかには、東野村や岩室村のように、複数の領主が分割支配する相給村もある。近世初頭から幕末まで一度も領主が変わらなかったのは、狭山藩北条氏が陣屋上屋敷を築いた池尻村のみであった。

これらの9カ村の名称は、現在の地区名にもつながっている。

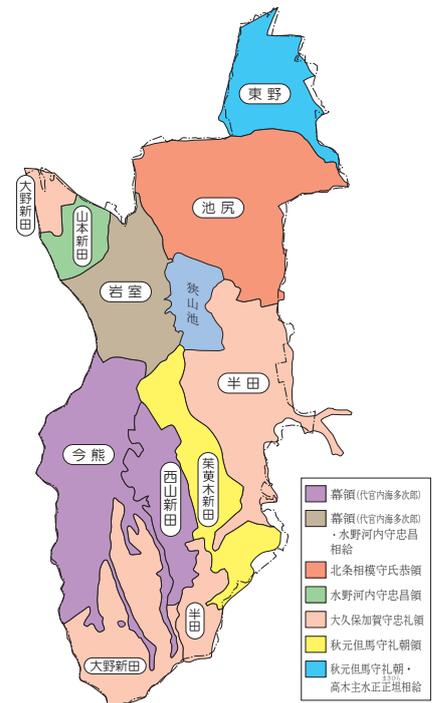


図 3-34 慶應 4 年（1868）時点の市域の所領配置
（『大阪狭山市の歴史』所収の図を転載）

表 3-35 村ごとの領主支配の変遷

	1645 年	1699 年	1737 年	1779 年	1868 年
東野村	北見重勝 石川忠総 (山年貢)	幕府 本多康慶	秋元喬房 幕府	秋元永朝 高木正弼	秋元礼朝 高木正坦
池尻村	北条氏宗	北条氏朝	北条氏朝	北条氏昉	北条氏恭
半田村	幕府	幕府	幕府	幕府	大久保忠礼
岩室村	北条氏宗 高木正弘 (山年貢)	北条氏朝	幕府 水野忠富	幕府 水野忠敞	幕府 水野忠昌
今熊村	北条氏宗 高木正弘 (山年貢)	北条氏朝	幕府	幕府	幕府
茱萸木新田	幕府	幕府	秋元喬房 水野忠富	秋元永朝 水野忠敞	秋元礼朝 水野忠昌
山本新田			幕府	幕府	幕府
西山新田			幕府	幕府	幕府
大野新田			幕府	幕府	大久保忠礼

（『大阪狭山市の歴史』所収の表に加筆・修正）

5 近現代

①明治の地方制度の変遷

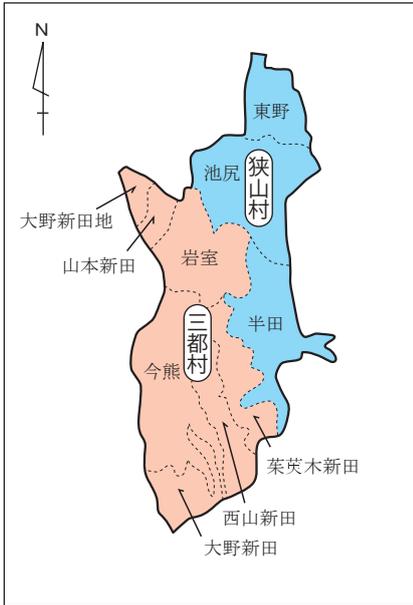


図 3-36 狭山村と三都村
 (『大阪狭山市の歴史』
 所収の図を転載)

明治 2 年 (1869)、^{ほんせきほうかん}版籍奉還が行われ、12 代藩主^{ほうじょううじゆき}北条氏恭も 6 月に知藩事^{ちはんじ}に任命されたが、その任に堪えられないとの理由で、知藩事辞職を申し出た。同年 12 月、その申し出が認められ、狭山藩は廃藩となり、藩領は堺県へ編入された。狭山藩は、明治 4 年 (1871) に実施される廃藩置県よりも前に、約 260 年にわたる歴史に幕を下ろすことになったのである。

幕藩体制に終止符が打たれ、明治政府が樹立され、地方制度も大きく変わり、幕府・譜代大名大久保氏・旗本水野氏の所領にあたる本市内の 6 カ村は、明治 2 年 (1689) 8 月に堺県に編入された。同年 11 月には、東野村と菜苺木新田も堺県に編入された。

それ以降も、地方行政制度の変遷により、各村々は様々な組織に編入されることになる。明治 5 年 (1872) 2 月、堺県に区政が施行され、9 カ村はいずれも河内国第 22 区に属した。そして明治 7 年 (1874) 1 月、堺県に大区小区制が施行され、河内国第 1 大区 3 小区に属した。その後、堺県は連合町村制を実施し、9 カ村は古市郡役所管内の第 5 連合に属した。

明治 14 年 (1881) 2 月、堺県が廃止され、9 カ村は大阪府に編入された。それにともない、連合町村制も廃止され、各町村に公選の戸長が置かれた。しかし、明治 17 年 (1884) 6 月、戸長を選挙で選ぶ方式をやめ、府県庁が選ぶ戸長官選制が導入された。この時、官選戸長の管理区域が、戸数 500 を基準に新たに設定された。9 カ村のうち、東野・池尻・半田の 3 カ村は丹南郡第 34 戸長役場の管轄となり、岩室・今熊・山本新田・菜苺木新田・西山新田・大野新田の 6 カ村は丹南郡第 35 戸長役場の管轄となった。

明治 22 年 (1889) 4 月、市制・町村制が施行され、第 34 戸長役場の 3 カ村が狭山村に、第 35 戸長役場の 6 カ村が三都村となった。こうして、近世の 9 カ村は、近代になって狭山村と三都村という二つの村に再編成された。この二つの村は、およそ 40 年後の昭和 6 年 (1931) 6 月に合併することになる。

図 3-37 高野鉄道運行表
 (田中俊夫氏蔵)

②鉄道の開通と神社合祀

日本の近代化に大きな役割を果たした鉄道は、関西でも^{はんかい}阪堺鉄道や関西鉄道など、多くの私鉄会社が発足した。明治 26 年 (1893)、現在の堺市から和歌山県橋本市へのルートを敷設する

コラム 『迎月庵幻俳句集』 にみる郷土の姿

『^{げいげつあん}迎月庵幻俳句集』は、本市名誉市民である末永雅雄先生のご尊父である末永勝三郎氏が、明治30年（1897）から昭和2年（1927）までに詠まれた1万6千もの俳句を収めたものである。この俳句集に詠まれているのは、ほとんどが狭山に関する句であり、家庭の内外の身近雑事から村の年中行事はもとより、狭山の風光から動植物、時には小旅行の見聞、日露戦争などの記事に至るまで、明治・大正期の狭山の姿を語って余すところがなく、狭山の記録としても誠に貴重なものとなっている。



図 3-38 天候画入日誌簿（個人蔵）



図 3-39 天候画入日誌簿（末永勝三郎氏著）（部分 個人蔵）

（毎日の天候を絵で描き俳句を添えている）



図 3-40 迎月庵幻俳句集

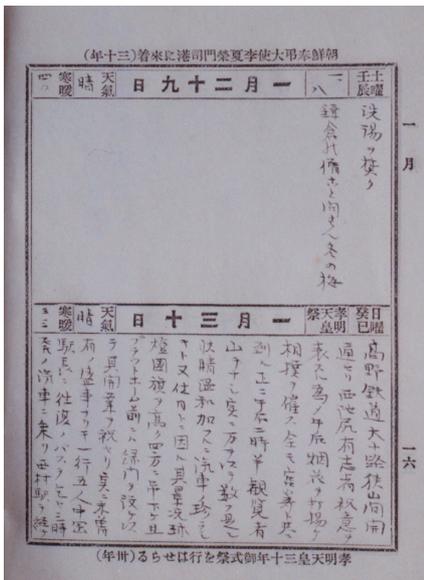


図 3-41

狭山神社山崎社司日記

(部分 狭山神社蔵)

(合祀の村内の動向が記されている)

堺橋鉄道株式会社（翌年に高野鉄道株式会社に改称）が誕生し、明治 29 年（1896）から狭山村内でも測量が始まった。また同年 8 月には、現在の天王寺駅から狭山駅までをつなぐ「狭山鉄道」も計画されたが、実現には至らなかった。

明治 31 年（1898）1 月に、高野鉄道が大小路（堺東）－狭山間で開業した。この日は、開通を祝う花火の打ち上げと相撲興業があり、多くの人々が車両を一目見ようと駅に押し寄せた。狭山の人々にとっては、鉄道の開通は期待のふくらむ大きな出来事だったのである。

明治期の大きな出来事の一つに神社合祀がある。神社をなるべく村ごとに一社に整理統合することが行われた。狭山村にあった六つの神社のうち 5 社（半田の狭山神社・狭山堤神社、池尻の狭間神社・宇賀美多麻神社、狭山新宿の八雲神社）は半田の狭山神社に集められ、東野の大歳神社は菅生村の菅生神社に合祀された。

三都村に八つあった神社（山本の稻荷神社、岩室の熊野神社・巖島神社・愛宕神社・琴平神社、今熊の熊野神社、茱萸木の八幡社、大野の八幡社）は、すべて今熊の熊野神社に合祀された。そして今熊の熊野神社は、村名である「三都」を新たに冠し、三都神社となった。これで、一村一社が実現した。

大阪府は、神社合祀が強力に進められた地域であったが、本市においても神社合祀が完全実施されることとなった。

③狭山村と三都村の合併

本市を南北に通じる高野鉄道は、明治 31 年（1898）の狭山駅の開業後も、大正 6 年（1917）に河内半田駅（現大阪狭山市駅）、昭和 12 年（1937）に金剛駅が開業している。高野鉄道は、昭和 22 年（1947）に南海電鉄高野線となった。

昭和 6 年（1931）に、狭山村と三都村が合併し、新たな狭山村が誕生した。このころの日本経済は、昭和 4 年（1929）に発生した世界恐慌の影響を受け、昭和恐慌と呼ばれる深刻な不景気に陥り、狭山村でも大変厳しい財政状況であったという。またこの昭和 6 年（1931）は、大阪府内においても 8 件の合併が行われた年で、どこの市町村においても緊縮財政が実施され、行政の効率化が必要になっていた。このような背景を受けて、狭山村と三都村は合併したのである。

しかし、小学校の統合と新役場の位置をめぐり、両村の間ではなかなか折り合いがつかなかった。協議は断続的に行われたが、折り合いがつかないまま新しい狭山村が誕生するのである。狭山池北堤に新役場が完成したのは、合併から 7 年後の昭和 13 年（1938）のことである。

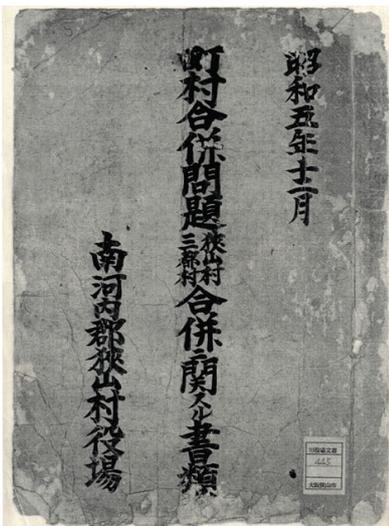


図 3-42 町村合併協議書類

④敗戦からの復興

太平洋戦争の敗戦を経て、昭和26年（1951）、狭山村は町制を施行し狭山町となった。人口は1万人に満たなかったが、町制施行にともなう環境の整備により、人口の増加と市街化を期待していた。

戦後の復興を象徴する出来事に、昭和25年（1950）の「高松宮殿下御来村記念事業」と昭和27年（1952）の「狭山競艇」の開始がある。特に「狭山競艇」は、戦時中はイモ畑になっていた「狭山池遊園」の敷地に、3千人の観覧席などを備えた「狭山競艇場」が完成した。最初は多くの観客を集めたが、次第に観客数の不足により赤字が続き、さらには日照りのため狭山池の水が不足し、レースが中止され、昭和31年（1956）4月に廃止となった。

しかし、その後、狭山の元気を取り戻すような出来事が起こる。「狭山池遊園」の再開である。早くから地元では復興を支える貴重な観光資源として、遊園地の復活を南海電鉄に求めていた。その結果、要望が実り、「狭山競艇場」の廃止から3年後の昭和34年（1959）4月、「さやま遊園」として復活する。「さやま遊園」は、平成12年（2000）に閉園するまで、約40年間、娯楽の場として地域の人々に愛され、親しまれた。



図3-43 さやま遊園のこどもカーニバル
(昭和34年頃)

⑤狭山ニュータウンの開発と市制施行

昭和30年代から40年代にかけて、日本は高度成長と呼ばれる急速な経済成長を遂げた。この時期は会社に通勤するサラリーマンが急増し、大都市郊外に次々と新興住宅地（ニュータウン）が開発された。狭山ニュータウンも、その一つである。

町制施行10周年にあたる昭和36年（1961）、町西部の丘陵地帯を開発し、ベッドタウンをめざす計画が立てられた。このころは、国内初の大規模宅地開発事業として知られる吹田市・豊中市の千里ニュータウンや堺市の泉北ニュータウン、富田林市の金剛団地の開発など、大阪府内で次々とニュータウン開発が進められた時期でもあった。狭山町も、沿線開発の一環として住宅開発事業に乗り出していた南海電鉄と協力し、狭山ニュータウンの開発に動き出したのである。

昭和42年（1967）4月に狭山ニュータウンの起工式が行われ、「新しい太陽の丘」をキャッチフレーズに、人口密度を低く抑え、宅地面積の広い一戸建てを中心としたまちづくりをめざした。昭和44年（1969）6月から入居が始まり、人口が急増し始めた。

狭山ニュータウンではインフラ整備が進み、公共施設を備えた



図3-44 ニュータウンの開発風景
(昭和43年頃)



図 3-45 NHK 公開番組シナリオ
(市制施行記念事業として NHK の番組
収録も行われた)

地区センター、小・中学校、商業施設などがつくられた。昭和 50 年（1975）には、近畿大学医学部附属病院が狭山ニュータウン最南部に開院し、医療体制も充実した。

狭山ニュータウン以外にも大小の開発が行われ、公共施設も充実し、人口は 9,648 人（昭和 35 年）から 46,508 人（昭和 55 年）へと 5 倍に増加した。こうして狭山町はそれまでの農村集落から大都市近郊の住宅都市へと大きく変貌した。

そして、昭和 60 年（1985）の国勢調査で人口は 5 万人を超え、昭和 62 年（1987）10 月 1 日に狭山町は市制を施行し大阪狭山市となった。全国で 654 番目、大阪府内で 32 番目の市の誕生である。9 月ごろから市民を「主役」とした記念事業が開催され、「大阪狭山市民祭」や NHK の公開番組は、当時の世相を反映している。

⑥市制施行後のあゆみ

平成 3 年（1991）策定の「第二次大阪狭山市総合計画」では、「水と緑豊かな創造文化都市」を将来像に掲げ、文化行政を重視した。そして、文化・社会教育施設の整備が進められ、平成 6 年（1994）には大阪狭山市文化会館（SAYAKA ホール）が開館した。また、平成 3 年（1991）には、大阪狭山市史編さん事業も始まった。平成 13 年（2001）策定の「第三次大阪狭山市総合計画」では、「ふれあいが人をはぐくむ水の郷」を新たな将来像とし、まちづくりの中心に「人」を位置づけた。また、平成 14 年（2002）には、市民が主体となって「狭山池まつり」が初めて開催され、以降毎年開催されている。

平成を代表する出来事に、狭山池の平成の改修がある。昭和 57 年（1982）8 月の豪雨によって洪水が発生し、大阪府南部、狭山池の下流の西除川流域では床上浸水などの大きな被害を受けた。一方、高度経済成長の結果、大阪府では宅地化が進み、農地が減少した。そのため、狭山池は、農業用水の供給という役割に加え、治水対策として洪水調整機能を強化する役割が期待された。

狭山池の治水ダム化計画は、昭和 63 年（1988）から始まり、平成 14 年（2002）に完成した。平成の改修と呼ばれるこの工事によって、狭山池では池周辺の環境も新たに整備され、狭山池公園として生まれ変わった。狭山池は現在、多くの市民や府民の憩いの場となり、各種のイベントも開催されている。

そして、平成 13 年（2001）3 月には、狭山池のダム化工事にともなう文化財調査で出土した多くの文化財を保存・展示する狭山池博物館が開館した。これらの発掘された文化財の多くは、平成 26 年（2014）8 月に国の重要文化財に指定された。また、狭山池は平成 27 年（2015）3 月に国の史跡に指定された。

表 3-1 市名候補

委員会を選んだ15種類の市名候補

市名	応募数
河内狭山市	329
さやまし	121
大阪狭山市	117
南大阪市	115
南狭山市	108
狭山池市	75
金剛市	47
新狭山市	42
金剛狭山市	28
南河内市	27
田園狭山市	22
西狭山市	22
泉狭山市	12
三都狭山市	7
狭山三都市	6

『大阪狭山市史 第一巻
本文編通史』所収の表を転載)

コラム マスコットキャラクターさやりんの誕生

市民と行政との協働のまちづくりが進む大阪狭山市において、平成20年（2008）に狭山池をモチーフにしたマスコットキャラクターが発表された。元気で明るい竜の子をイメージして、瞳の色は狭山池の水面を象徴する青、髪は大阪狭山市の木である桜の花をモチーフにしたものが選ばれ、愛称が「さやりん」となった。「さやりん」は、平成25年（2013）10月には大阪狭山市観光大使の委嘱を受け、市内外への本市の魅力の紹介や、本市の都市イメージの向上・観光振興などの活動をしている。



図 3-46 市の広報活動を行うさやりん



図 3-47 さやりん

第2節 日々の暮らしの変遷

1 本市の民俗

かつては静かな農村の様相を呈していた本市では、農業を中心に生活が営まれていた。昭和40年代に入ってからの経済の高度成長とともに、大阪市などのベッドタウンとして急速に発展したことにより、本市の様相は一変した。都市化は、自然環境のみならず、生産や生活の様式、諸行事や慣習、信仰、そして村落の連帯意識にまで変化を与えた。本市の歴史文化の変遷を語る場合、都市化によって大きな影響を受けた本市の民俗について特記することが必要である。

大阪府の南部に位置する本市は、周辺市町村と同様の大阪南部地方の民俗に共通するものを多くもち、本市独自の民俗は、それほど多くない。しかし、民俗調査によって知りえた本市域の民俗は、先祖が歩んでいた身近な生活の足跡である。現在の暮らしに至るまでの変遷をたどってみる。

2 興味深い年中行事

①稲作を中心とした行事

農村では、稲作を中心に日常生活をしていた。稲の成長に応じて、その節々で稲の豊作を願う行事を行ってきた。

4月のハルゴト（春ごと）のあと、八十八夜の^{もみ}糶種まきがあり、田植え前の旧暦の5月5日に牛の爪切りを行った。田の水口にツツジを立てて神を祀った。そして田植えを行った。田植えは、ハゲツショ（^{はんげしやう}半夏生・夏至から数えて11日目）までに行った。この日はアカネコ（小麦餅）を作った。壺に入れて布巾をかけて保存し、取り出してきな粉をまぶして食べた。アカネコを作る家庭は、年々減少してきている。

イノコ（亥の子）は、旧暦の10月の亥の日に行われていた子どもの行事である。大阪近郊ではほとんど失われているか、あっても意味が忘れられて、子どもの夜遊びのできる日になってしまっている。本市の一部の地区では、稲の収穫を祝う祭りとしてのイノコ（亥の子）の行事が、子どもたちによって行われている。



図 3-48 イノコ（山本地区）

②正月の食物

小豆は正月に欠かすことのできない食品で、オオツゴモリ（大晦日）の夕食に「箸おさめ」といってゼンザイを食べる風習が一般的であった。それが今ではソバを食べるようになった。正月の用意は31日から男性が行う。アサゼチを祝って神社にお参りする。元日の夕食はユウゼチといって、ご飯に魚の焼き物とヒラを出す。ヒラとは、シイタケ、ニンジン、ゴボウ、タケノコ、ササギ、カンピョウ、高野豆腐、かまぼこ、ゆで卵などから、5色か7色の奇数の材料を煮た物で、めでたい時に作った。

③珍しい盆の行事

本市の盆の行事の中で、^{しんぼとけ}新仏を迎える初盆の行事は、大変珍しいといわれている。8月7日に、アラタナ（新棚）という杉皮や竹などで作った棚を設営して新仏を祀り始める。そして、新仏に近い縁者が屏風のようなラクガン（落雁）を供える。この風習は今は狭山付近と和泉市の一部でしか見ることのできないものである。

本市では、この7日を「七日盆」とも「タナまつり」ともいう。タナは縁先の軒下に置かれ、家の中で祀ることはなかったが、最近では家の中に置かれるようになった。タナを設置した7日か翌日^{かんのんこう}に^{えいか}観音講の女性のご詠歌をあげに来る。

仏壇に供えるオチャトウは、お茶が冷めないうちに次々取り換えるもので、取り換えられたお茶は、横に置いてあるバケツに捨てる。夜になって、外の水の流れのあるところで捨てるのは^{がき}餓鬼にやるといふ意味だといふ。

アラタナやラクガン、オチャトウは、現在においても盆の行事として行う家が多い。



図 3-50 初盆のアラタナとラクガン

図 3-49 オチャトウを餓鬼に供える

④月見

9月の中秋の名月を十五夜といい、お月見をした。おにぎりや小芋やこんにゃくを炊いた（煮た）ものを供えた。また、ススキや稲の穂、秋の七草を花瓶に入れて供えもした。他に柿やサツマイモや酒も供える地区もある。

3 村の組織と信仰

①講

講とは、特定の神や仏を信仰する人々の集まりをいう。市内には天神講・伊勢講・日待講・山上講・詠歌講・念仏講・逆修講・観音講などがある。これらの講は、近世の『村明細帳』などにも記述がみられ、農村の庶民の生活と密接な関係があった。

その中で東野の天神講は、菅生神社の信仰団体で2組あり、3月25日に当番のトヤ（当屋）の家で、男性によって行われる。天神の軸をかけて祀り、太鼓を叩いて村に触れるというこの行事は、菅生神社所蔵の絵巻にその様子が描かれている。費用は講田の収穫から支出した。

天神講は、現在でも行われているほか、市内においては伊勢講や日待講、観音講などが地区によっては存在し活動しているが、全体的に講の存在が減少傾向にあることはいなめない。

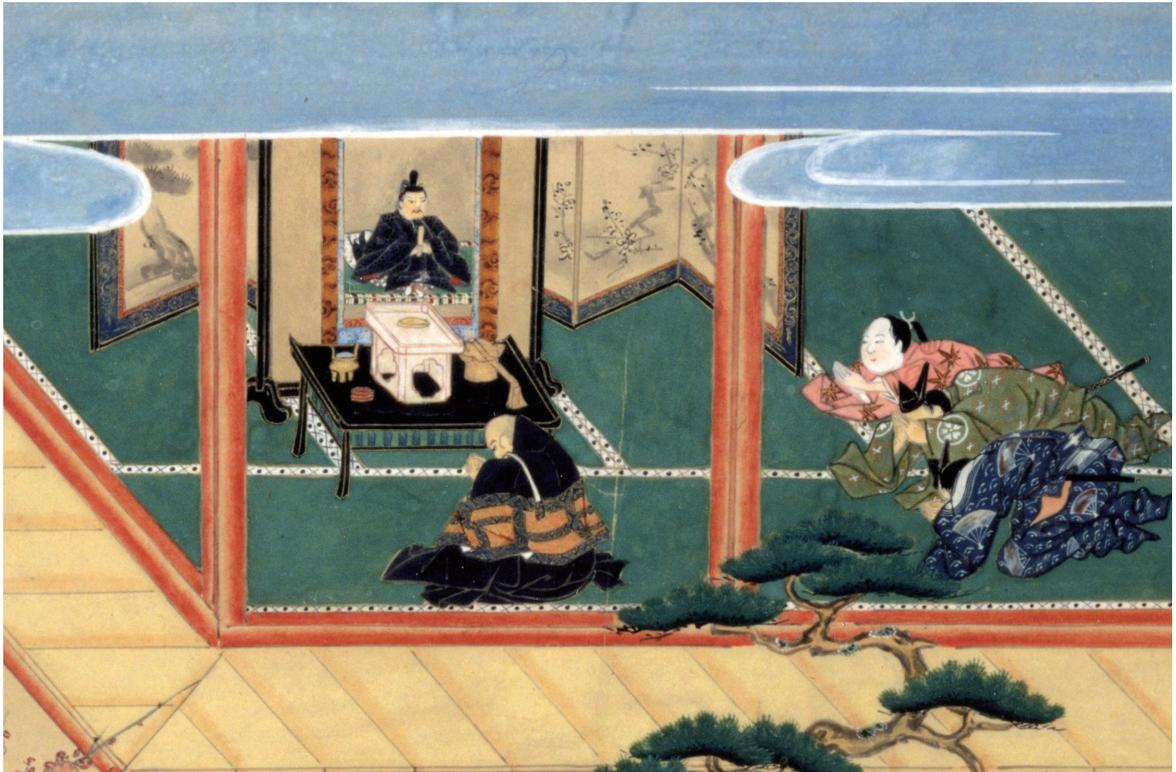


図 3-51 河内国丹南郡野田庄菅生宮并高松山天門寺縁起（部分：菅生神社蔵）

コラム 盛んだった大峰山に登る山上講

市内の各地区では、^{さんじょうこう}山上講が盛んであった。特に10代の男子が初めて^{おおみねさん}大峰山に登る行事は大事に扱われていて、半田や栄莢木では「男として生まれてから、大峰で修行していないと男でない」と言われ、今熊では大峰山に登ることを^{げんぶく}元服といった。各地区とも、^{どろかわ}洞川での宿は決まっていた。

行の中で特徴的なのは「西ののぞき」で、初めて参加する新役のものが家から持参した白^{たすき}い褌をかけ、崖から半身を乗り出して、崖下に祀られている観音様を見る。このとき、腕を前に伸ばして拝むように手を組んでおかないと褌がはずれるという。しかし大変恐ろしくて、ほとんどの者が目を開けていられなかったという。

この時に、先達が「親孝行するか」と尋ねる。「します」と答えると上へ引き上げてくれたが、何も言わなかったら「まだわからんのか」と言われて、さらに一段崖へ身を突き出されたという。

山上講のおみやげには、ダラニスケ（陀羅尼助・胃腸薬）を買った。



図 3-53 信仰の対象 大峰山



図 3-52 陀羅尼助丸

②茶組とモンカ

市内には、地域共同体・血縁共同体・同族集団が発達していて、「茶組」とか「モンカ」といった名称が残っている。これらは共に、葬式などの役を負擔する近隣の実質的な単位であった。池之原では、オモヤ（本家）とインキョ（分家）が離れていると、別の茶組に属しているという。地縁共同体の色彩が強いのである。茱萸木では「茶組」の役割をチョウ（町）が果たしていた。現在では、多くの自治会や地区会が存在するが、その加入率は約 60 パーセントと、このような組織に属していない人たちが多くなってきている。

「モンカ」とは民俗学的にいう同族であって、親族とは別のものとして認識されていて、「イトウ」とも呼ばれている。

③子ども会と青年団

戦後市内各地区に子ども会が次々と結成され、昭和 33 年（1958）には市内の子ども会を統合する連合子ども会も結成され、子ども会活動は活発であった。当時の子ども会活動の写真をみると冬季のウサギ狩りやトンド、イノコ（亥の子）などの行事が広く行われてきた。しかし現在では、子ども会は 10 団体に満たない状態である。

青年団は各村にある組織であるが、青年団の活動はダンジリ（地車）とともにある。ダンジリがないところでは、青年団が早くなくなっているという。また、かつてはダンジリの上で青年たちが、ニワカという漫才などの芸能をして喜ばれていた。現在では、ダンジリをゆすったり傾けたりするパフォーマンスが盛んになってきているほか、昔では見られなかった連合引きが行われるなど、ダンジリの曳行にも変化がみられる。

以前は、10月10日と11日にダンジリ曳行があったが、現在では10月の第2土曜日と次の日曜日に行われるようになった。



図 3-54 トンド（昭和 50 年代、東野地区）



図 3-55 子ども会活動のウサギ狩り（昭和 35 年、個人蔵）

4 人生儀礼

①婚姻と産育

婚姻は、本市内の者同士でしたことが多かった。盆踊り・村芝居・祭りなどが知り合う機会であった。これは、男の仲間の間では公然であったという。これに対して、両者が村外の場合は、呉服屋などが話を持ってきたという。

婚礼は秋が多かった。結婚式の当日、夜の嫁入りの前に、朝 10 時ごろ、婿入りがあった。仲人と父親と叔父の 4 人で花嫁の家に行ったという。そして、仲人を残して 3 人は帰る。嫁はこの席には出ない。嫁入り道具は鏡台から入れる。披露宴には、男性だけが出席する。新夫婦の部屋のフトンの上には、婿さんの枕を上、嫁さんの枕を下に置いた。婚礼の翌日はカカジャ（衣装見せ）で、近所の女性に嫁を披露する衣装見せとともに膳を出した。嫁が所帯人（家計担当者）になるのは、子どもができてからである。

現在では、若者の広い活動範囲を反映し、市内の者同士の婚姻は少ない。また、婚礼の様相も、大きく変わりつつある。

産育・婚姻・お宮参りは、女性ばかりでしたという。食い初めのときは、^{はがた}歯固めと言ってタコの切り身を新生児の母方の祖母が食べさせる所作をする。さらにご飯に不自由しないようにと、ご飯を山盛りにした。出産は婚家先ですが、それ以降の子どもの祝いなどは母方が担う。歯固めの儀式も、その一つである。



図 3-56 歯固め



図 3-57 結納の飾り

②葬送と墓制

葬送儀礼では、ドウギョウ(同行)が葬儀の段取りをした。死者の枕元に、ご飯(枕飯)、枕団子、ビシャコ(ヒサカキ)の花を供えた。そして、死者の一番大事な着物を布団の上に掛けた。詠歌講のドンカイサン(呑海さん)がご詠歌をあげて、ヨトギをする。これがお通夜である。葬式の責任者は組長で、村人に会計、受付、道具作り、炊事、お寺の係などが決められる。葬式の会計が決まると、会計は喪主よりお金を預かり、葬式の一切の費用をここから出す。買い物などの領収書は全部もらい、仕上げの席で喪主に会計報告をし、残りの金を返す。現在では、葬儀業者が葬式を仕切り、葬儀会館で葬儀を行う家が圧倒的に多い。

また墓制では、本市に限らず近畿地方の農村部では、ムラを単位として設けられるのが一般的である。しかし、複数村で一つの墓地をもったり、家単位で墓地を所有したりすることもある。例えば大三昧墓地は、今熊・半田・茱萸木の共同墓地であるが、半田は大三昧墓地と小三昧墓地の2カ所の墓地を利用している。また、狭山池の池守を務めた田中家は、村の墓とは別の墓地を所有している。

一方、市内の複数の地区で、埋葬地と石塔の場所が異なる両墓制が見られる。茱萸木地区では集落の中心にある正法寺の裏側に墓地があるが、ここには死体を埋葬せず、小三昧墓地に埋葬した。

本市域においては、昭和30年代ぐらいまでは土葬が行われていたが、町の斎場が完成した時から火葬にされている。また、いつのころからか、両墓制は失われていった。

コラム 三十三度行者と供養塔

三十三度行者とは、西国三十三観音霊場を33回巡礼する修行を行う行者で、それを実践するための組織に属していた。明治以降、六つの組があり、本市域を訪れていたのは主として葉室組はむろぐみの行者であった。

第二次世界大戦以前には、毎年1度か2度、「サンドさん」とか「オセタはん」と呼ばれる僧形の巡礼者の姿が見られた。彼らは特定の家を訪れると、背にした笈せだを下し、中から様々な荘厳具しょうごんぐを取り出して、小振りながら華麗な祭壇を作り上げた。

笈には数百軒から千数百軒の家々を記した宿帳が付属していて、行者に結縁する宿、あるいは檀家が記されていた。行者は単に33カ所を巡るだけではなく、こうした多くの家を訪ね、ともに仏を拝み、先祖の供養をした。檀家は大阪府南部と和歌山県の紀ノ川流域に集中していた。

三十三度行者の修行の満願供養にともなって造立される供養塔は、江戸時代前期以降昭和の戦前期のものまで約150基が確認されていて、そのうち3基が本市の風輪寺ふうりんじ、西池尻墓地さいごうじ、西迎寺さいごうじに現存している。



図 3-58 三十三度行者（昭和30年代頃）
（中川正博氏提供）



図 3-59 西迎寺の三十三度行者供養塔

